



今回は、地球環境問題を、時間的タイムスパンを変えながら考えてみたいと思います。

## 地球環境問題 地球誕生編

最近、NHKの「地球大進化」という連続番組を少なからず感動して見ていました。それによると、地球が太陽系の中で生命誕生可能な安定した大気を持ったのは、太陽からの程よい距離と、地球が小惑星の衝突等により偶然に程よい大きさになったことに起因するということです(それにより宇宙空間から大気の原因となるガスを程よく引きつけた)。そしてその後、生物の進化とそれを壊滅させる小惑星の衝突という天変地異が起りながらも、地球内部に逃げ込んだ微生物が生き延び地球環境の安定に伴ってまた進化を続けてきた、といったことが迫力のある3Dアニメとナレーションで語られていました。

こうしてみると、生き物と地球環境の関係を地球史的スパンでみてみると、生き物は地球進化に伴う地球環境の激変(生命体に体にとっては環境問題)を何度も繰り返し経験し、その度に進化していったことがわかります。

さて最近のインド洋沖の大地震、パキスタン北部の大地震、また世界いたるところでの火山爆発による環境問題は、地球自身からみれば一種の生理現象でしょう。しかし、その表面の薄い大気層の中にへばりついている?小生物群(あるいは人類だけ)が、己の生存環境の維持というスタンスで捉えると、これが地球環境問題となるわけです。

## 地球環境問題 古代文明編

視点を変えます。人間(人類)の立場で考えてみましょう。

古代文明を地球環境問題との関係で捉えると、それは壮大な環境破壊の上に成り立っていたことがわかります。文明の基本的衝動は都市建設と領土拡大です。このためには膨大なエネルギーを必要とし、そのエネルギー源は森林(木材)でした。覇権を争い、強い国家は鉄を必要としました。その製錬のためには火力が必要であり、火力源として森林(木材)を求めま

した。

また古代の地中海諸国の文明に目をむけると、地中海の制海権を確保するには海軍力が必要であり、競って森林を伐採し造船の建造競争を繰り返しました。このことにより、緑豊かな地中海沿岸も裸の山に変わり、強い太陽と雨量の少なさにより再び緑がよみがえることはありませんでした。豊かな森林を背後に持たない海は芳醇な海を作りだすことはできません。眩いまでの地中海の青さと海岸の白さは、生態系にとっては貧相な光景ともいえます。

文明によっては、メソポタミア文明のように、都市の造成や建物に膨大な焼きレンガを使用していたため、その製造のために大量の森林(レバノン杉)を伐採し続け、中東の森林を壊滅させてしまった文明もあります。メソポタミアのギルガメッシュの叙事詩には、伝説の王ギルガメッシュと森林の神フンババの戦いが描かれており、その中で森の神フンババが倒されることは、何か象徴的です。

中国の文明はというと、やはり鉄製錬のために大河沿岸に広がっていたと思われる森林を伐採するとともに、水田や畑作の拡大をすすめる、草原の草木までも剥ぎ取った結果、雨量の少なさから砂漠化も進行し、文明の崩壊へと繋がっていきました。

このようにみると、古代文明は地球資源の収奪=自然環境の破壊によって栄え、破壊尽くし資源が枯渇していく過程で衰退・消えていったといえます。

## 地球環境問題 近代 - 現代編

18世紀に産業革命がイギリスにおいて始まると、エネルギーの消費量は急激に増大しました。この頃のエネルギー源も当初はやはり森林(木材)でした(石炭もありました採掘に困難を伴いポピュラーではありませんでした)。イギリスを始めドイツ等のヨーロッパは豊かな森林に覆われていましたが、イギリスを震源とする産業革命の波がヨーロッパの森林を飲み込んでいきました。イギリスに森林が少ないのは再生力の弱い気候風土のなかで、森林伐採が急速に進んだ結果です。またドイツと言えば、あの有名な深い森を思い浮かべる方もおられますが、実は、以上の反省に立ち、その後に植林し育てた森なのです。ヨーロッパの人たちが自然環境に対して敏感で保護育成に熱心なのは、このような歴史的環境認識があるからでしょう。

ともかく、最近の温暖化等の地球環境問題を聞くにつけ、我々は地球の表層数十キロメートルという薄い大気のみならず生存可能領域に生きているという事実と、過去に人類が犯した環境破壊の教訓から、地球環境問題の今日の本質について、想像力を逞しくして描き、認識する必要があるように思われます。